

座長／国立スポーツ科学センター／川原 貴  
／慶應義塾大学医学部スポーツ医学総合センター／松本秀男

1989年に設立された日本臨床スポーツ医学会の学術集会は25回を数え、スポーツ医学の発展に寄与してきたが、多くの課題がある。

スポーツ医学は戦前からの伝統があり、戦後も1964年東京オリンピック時には多くの医師が関わったが、スポーツ医学としてのシステムは残らなかった。スポーツ医学が広く認知されるようになったのは、1982年に日本体育協会公認スポーツドクター制度が発足してからであった。1986年には日本整形外科学会認定スポーツ医、89年日本医師会健康スポーツ医の養成が開始された。これらスポーツドクターを基礎に1989年日本臨床スポーツ医学会が設立され、スポーツ医学が発展してきた。

スポーツ現場では、日本体育協会、日本オリンピック委員会、中央競技団体、都道府県体育協会などの競技団体は、ほとんどが医事組織を有するようになった。また、チームスポーツ、特に外傷・障害の多い競技の社会人チーム、大学チームではチームドクターが普及してきている。しかしながら、わが国のスポーツの基盤をなす、少年団、中学・高校の運動部活動、地域スポーツクラブなどへのスポーツドクターの関与は少ない。

医療現場では、多くの大学病院にスポーツ外来が設置され、民間の医療機関でもスポーツ専門部門があるところもあるが、整形外科のみが多く、内科、婦人科なども含めて総合的な診療体制があるところは少ない。また、スポーツ外傷・障害への対応が主であり、内科疾患等に対する運動療法や介護予防の運動などに対応しているところは少ない。

スポーツ医学の実践にはパートタイムで関わる多くのスポーツドクターが必要であるが、スポーツ医学がスポーツ現場や医療現場でさらに役割を果たしていくには、スポーツ医学の拠点を作り、スポーツ医学を専門とする人材を確保することが必要であると考え、このシンポジウムを企画した。スポーツ医学の拠点にはいろいろな形がありうるが、理想的には、子どもから高齢者まで、競技スポーツから有疾患者の運動療法まで幅広く対応できることが望ましい。

シンポジストには、スポーツ医学拠点で活動されている4人の先生方をお願いした。

松本秀男先生には大学における拠点として慶應大学スポーツ医学総合センターの活動について、宮川俊平先生には、筑波大学を中心とした医学サポートのネットワークについて、荒川正昭先生には都道府県におけるスポーツ医学の拠点として新潟県健康づくり・スポーツ医科学センターの活動について、勝木保夫先生には地域健康増進施設としての北陸体力科学研究所の活動について、お話しいただいた。大学、自治体、民間などいろいろなスポーツ医学拠点のあり方が理解いただけたのではないだろうか。このシンポジウムが、わが国のスポーツ医学拠点の充実と増加の一助となることを願うものである。